

W-2-2

長崎市方言における不定語を含む語・文の音調と複合法則^{*,**}

佐藤久美子

国立国語研究所 プロジェクト非常勤研究員

(satok@ninjal.ac.jp)

1. はじめに

1.1. 音調の指定 (平山 1951、坂口 2001、松浦 2014)

長崎市方言では、それぞれの語が基底で二種類の音調のいずれかを指定されている。

(1) 音声形¹

- a. A 型：低く始まり、語頭から 2 番目の拍が高くなり、その後下降する。ただし、2 拍の語では、語頭の拍が高く、その後下降する。

ウメ、**リンゴ**、**カゴシマ**、**マグル** (曲げる)、**オボルル** (溺れる)、**アマカ** (甘い)

- b. B 型：高平ら、もしくは低く始まり漸次的に上昇する²。

ミソ、**ミカン**、**オキナワ**、**ナグル** (投げる)、**オボユル** (覚える)、**フルカ** (古い)

(2) 複合語における変調 ①

- a. **ウメ**_A + **アジ**_A → **ウメ#アジ**_A (梅味)
b. **ウメ**_A + **イロ**_B → **ウメ#イロ**_A (梅色)
c. **ミソ**_B + **アジ**_A → **ミソ#アジ**_B (味噌味)
d. **ミソ**_B + **イロ**_B → **ミソ#イロ**_B (味噌色)

(3) 複合語における変調 ②

- a. **リンゴ**_A + **アジ**_A → **リンゴ#アジ**_B (りんご味)
b. **リンゴ**_A + **イロ**_B → **リンゴ#イロ**_B (りんご色)
c. **ミカン**_B + **アジ**_A → **ミカン#アジ**_B (みかん味)
d. **ミカン**_B + **イロ**_B → **ミカン#イロ**_B (みかん色)

* 本研究は、国立国語研究所の共同研究プロジェクト「対照言語学の観点から見た日本語の音声と文法」の研究発表会（2016 年 9 月 16 日）で発表したものをまとめたものである。本研究は、科学研究費補助金・基盤研究 A「日本語諸方言のプロソディーとプロソディー体系の類型」（課題番号 26244022：研究代表者：窪菌晴夫）の助成を受けている。

** インフォーマントは、長崎市生え抜きの 60 代（2 名）、80 代（1 名）の女性 3 名である。2015 年 5 月から 2016 年 9 月までの間に 7 回の調査を行った。

¹ 声が高くなる部分を太字のゴシック体で表記する。

² B 型の音声実現については松浦 (2014) で詳細が述べられている。本研究は音声実現を詳しく論じるものではないため、B 型の例は A 型と区別するために 2 拍目以降を「高」と表示する。

(4) 複合法則

前部要素の音調が全体の音調になる (平山 1951)。

ただし、前部要素が 3 拍以上の場合、全体は B 型になる³ (松浦 2014)。

1.2. 音調が音声的に実現する範囲

それぞれの語に定められた音調は、マイナー句 (MiP)において実現する。

(5) マイナー句: 語彙語 (-付属語)

(6) [名詞-助詞]_{MiP} の音声形

A 型	リンゴ-ガ _A	(りんごが)	B 型	ミカン-ガ _B	(みかんが)
	リンゴ-バ _A	(りんごを)		ミカン-バ _B	(みかんを)
	リンゴ-カラ _A	(りんごから)		ミカン-カラ _B	(みかんから)
	リンゴ-カラ-ガ _A	(りんごからが)		ミカン-カラ-ガ _B	(みかんからが)

(7) [(複合) 名詞-助詞]_{MiP} の音声形

A 型	ウメアジ-ガ _A	(梅味が)	B 型	ミソアジ-ガ _B	(味噌味が)
	ウメアジ-バ _A	(梅味を)		ミソアジ-バ _B	(味噌味を)
	ウメアジ-カラ _A	(梅味から)		ミソアジ-カラ _B	(味噌味から)
	ウメアジ-カラ-ガ _A	(梅味からが)		ミソアジ-カラ-ガ _B	(味噌味からが)

- (8) a. 長崎市方言では、それぞれの語が基底で A もしくは B の音調が指定されている。
b. 複合法則 (4)の適用によって変調が起こる。
c. (8a), (8b)によって定められた音調はマイナー句に実現する。

2. 不定語と「モ」の音調

2.1. 不定語の音調

不定語が単独で発話される場合は疑問詞と解釈され、全て A 型である。

(9) ダイ (誰)、ナイ (何)、イツ (いつ)、ドイ (どれ)、ドコ (どこ)、ドゲン (どんな)

(10) 複合語における変調

a.	ナニ _A + アジ _A	→	ナニ#アジ _A	(何味)
b.	ナニ _A + スー _B	→	ナニ#ズ _A	(何酢)
c.	ナニ _A + サクラ _A	→	ナニ#ザクラ _A	(何桜)
d.	ナニ _A + ハタケ _B	→	ナニ#バタケ _A	(何畑)

³ 前部要素の音調に関わらず複合語全体が B 型になるという現象と、それに語の長さが関わっているということは、坂口 (2001)が指摘している。

(11) [名詞-助詞]_{MiP} の音声形

ダイ-ガ _A	(誰が)	ナン-ガ _A	(何が)
ダイ-バ _A	(誰を)	ナン-バ _A	(何を)
ダイ-カラ _A	(誰から)	ナン-カラ _A	(何から)
ダイ-カラ-ガ _A	(誰からが)	ナン-カラ-ガ _A	(何からが)

(12) [(複合) 名詞-助詞]_{MiP} の音声形

ナニズ-ガ _A	(何酢が)	ナニアジ-ガ _A	(何味が)
ナニズ-バ _A	(何酢を)	ナニアジ-バ _A	(何味を)
ナニズ-カラ _A	(何酢から)	ナニアジ-カラ _A	(何味から)
ナニズ-カラ-ガ _A	(何酢からが)	ナニアジ-カラ-ガ _A	(何味からが)

2.2. 変調現象

不定語に「モ」が後続するとき、A 型から B 型への変調が生じることがある⁴。

(13) 不定語＋「モ」

ダイ	ナイ	ドイ	ドコ	ドゲン
ダイ-モ _A	ナン-モ _A	ドイ-モ _A	ドコ-モ _A	ドゲン-モ _B
ダイ-ニ-モ _B	ナン-ニ-モ _B	ドイ-ニ-モ _B	ドコ-ニ-モ _B	
ダイカラ-モ _B	ナン-カラ-モ _B	ドイ-カラ-モ _B	ドコ-カラ-モ _B	

不定語と「モ」の間に他の助詞が介在している場合、全て B 型になる。そうでない場合は「ドゲンモ」を除き A 型のままである⁵。

不定語以外の語に「モ」が後続する場合は、上記の現象は生じない。

(14) A 型 ウメ

ウメ-モ _A	(梅も)
ウメ-ニ-モ _A	(梅にも)
ウメ-カラ-モ _A	(梅からも)

A 型 リンゴ (りんご)

リンゴ-モ _A	(りんごも)
リンゴ-ニ-モ _A	(りんごにも)
リンゴ-カラ-モ _A	(りんごからも)

⁴ 本発表で示す不定語と「モ」が関わる B 型への変調は、文脈により生じない場合がある。それは、不定語がフォーカス（疑問詞や対比の要素など、文の意味的な焦点）となる場合であると考えられる。この点については、脚注 7 でも言及する。詳細については、Sato (2015) が議論している。

⁵ 「ドイモ」と「ドコモ」は、話者によっては B 型も許容されることがある。「投げやりな発言」とのコメントもあるが、詳細はまだ明らかでない。本発表では、より自然であるとされる A 型と考えて議論を進める。今後、より精密な記述が必要である。

不定語を含む複合語に「モ」が接続した場合、全て B 型になる。

(15) 不定語を含む複合語＋「モ」

ナニアジ	ナニズ	ナニザクラ	ナニバタケ
ナニアジ-モ B	ナニズ-モ B	ナニザクラ-モ B	ナニバタケ-モ B
ナニアジ-ニ-モ B	ナニズ-ニ-モ B	ナニザクラ-ニ-モ B	ナニバタケ-ニ-モ B
ナニアジ-カラ-モ B	ナニズ-カラ-モ B	ナニザクラ-カラ-モ B	ナニバタケ-カラ-モ B

- (16) 不定語と「モ」が共にマイナー句に含まれ、両者の間に他の要素が介在している場合、A 型から B 型へ変調する。例外的に「ドゲンモ」は B 型へ変調する。

2.3. 分析

本発表では、(16)の現象は複合法則 (4)の適用によって派生されると説明する。

- (17) 不定語と関係付けられる「モ」は、その直前に複合境界を持つ。

(18) 不定語 ＋モ⁶

- a. ダイ_A ＋ モ → ダイ#モ_A
b. ダイニ_A ＋ モ → ダイニ#モ B
c. ダイカラ_A ＋ モ → ダイカラ#モ B

(19) 不定語を含む複合語 ＋モ

- a. ナニズ_A ＋ モ → ナニズ#モ B
b. ナニズニ_A ＋ モ → ナニズニ#モ B
c. ナニズカラ_A ＋ モ → ナニズカラ#モ B

(20) 「ドゲンモ」

ドゲン_A ＋ モ → ドゲン#モ B

3. 不定語と「モ」の間に生じる高平ピッチ (佐藤 2015, Sato 2015)

不定語と「モ」を含む文では、両者の間に高平ピッチが生じる⁷。

⁶ 「イツモ」は一つの語彙項目としてレキシコンに存在し、語彙的に B 型が指定されていると考えなければならない。

⁷ 脚注 4 では、不定語と「モ」が関わる B 型への変調は文脈により生じない場合があることを述べた。同様のことが、ここでも起こる。不定語がフォーカスとなる場合、ここに示す高平ピッチは生じず、不定語を含め全ての語に基底の音調が実現する。

- (21) a. ナオコガ_A リンゴバ_A コオテモ_A ヨカ
 b. ナオコガ_A ナンバ コオテモ ヨカ
 c. ダイガ リンゴバ コオテモ ヨカ
 d. リンゴバ_A ダイガ コオテモ ヨカ

(直子がりんごを買っても良い)
 (直子が何を買っても良い)
 (誰がりんごを買っても良い)
 (りんごを誰が買っても良い)

- (22) a. ナオミガ_B ミカンバ_B クウテモ_B ヨカ
 b. ナオミガ_B ナンバ クウテモ ヨカ
 c. ダイガ ミカンバ クウテモ ヨカ
 d. ミカンバ_B ダイガ クウテモ ヨカ

(直美がみかんを食べても良い)
 (直美が何を食べても良い)
 (誰がみかんを食べても良い)
 (みかんを誰が食べても良い)

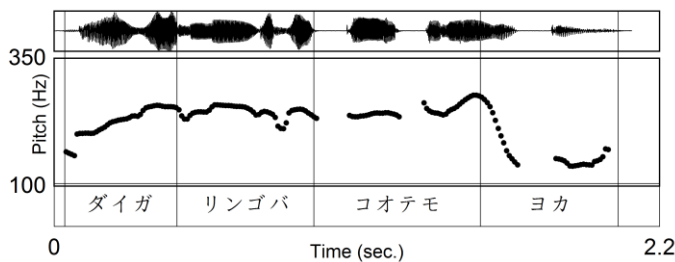


図 1: (21c)

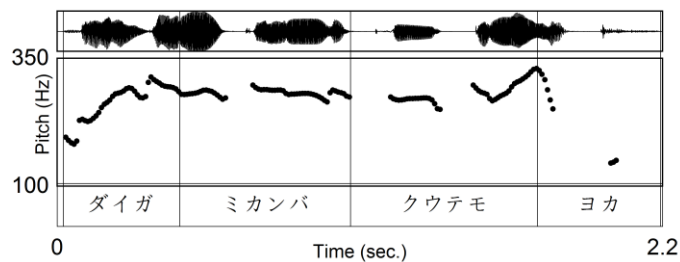


図 2: (22c)

間接疑問文や直接疑問文では、高平ピッチは生じない。

- (23) a. ダイガ リンゴバ コオタ ト↑
 b. ダイガ リンゴバ コオタカ シラン

(誰がりんごを買ったの?)
 (誰がりんごを買ったか知らない)

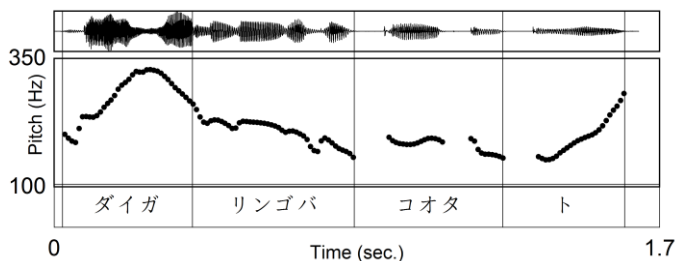


図 3: (23a)

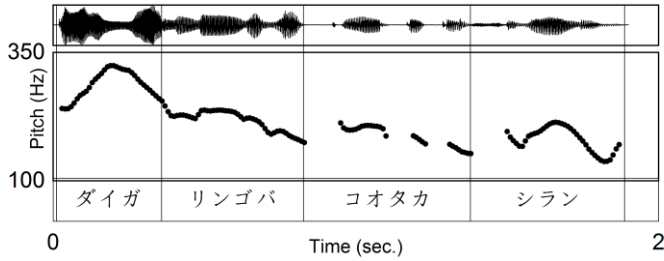


図 4: (23b)

Sato (2015)は、フォーカスを持たない不定語から「モ」までで一つのマイナー句が形成され、そのマイナー句にB型が実現していると分析した。しかし、マイナー句形成や音調指定の仕組みについて言及していない。

4. 統一的な説明

3 節で見た高平ピッチを、2 節と同様に複合法則による変調であるとして説明を試みる。類似の現象が福岡方言で報告されており、久保(2015)、Kubo (2016)が複合語としての分析を提案している。

- (24) 福岡方言におけるアクセントの消失 (早田 1985、例は Kubo 2016 (6a)の表記を改変)
 ダレガ キョネン ケツコン シター-ト-φ↑

(25) Kubo (2016)による福岡方言の分析 (Kubo 2016, p. 7, (12a))

/ φ / : C[+wh]

subcategorization: [WH X #____]COMPOUND

(25)により音韻論的複合語が形成され、複合語規則が適用されることによって(24)が派生される。

福岡方言と長崎市方言の違いは、福岡方言では C[+wh]である「φ」「か」「かいな」「やら」「も」が同様に下位範疇化されているのに対し、長崎市方言ではそれが「も」に限られ、また、不定語がフォーカスでない場合に限られるという点である。長崎市方言において(26)を提案する。

(26) 本発表の提案（長崎市方言）

mo[+wh]

[WH [-FOC] X #____]COMPOUND

(26)により音韻論的複合語が形成され、それに長崎市方言の複合法則(4)が適用されることで、3 節で示した、不定語から「モ」まで生じる高平ピッチが派生される。

(27) (21b): ナンバ コオテ + モ → ナンバコオテ#モ_B

(21c): ダイガ リンゴバ コオテ + モ → ダイガリンゴバコオテ#モ_B

5. まとめ

本発表では、長崎市方言における、不定語と「モ」が関わる変調現象（「**ダイニモ**」など）と、広範囲に及ぶ高平ピッチ（「**ダイガ リンゴバ コオテモ**」など）について、統一的な説明を試みた。(27)の提案に基づき、これら二つの現象は複合法則(4)の適用によって生じるものであると説明できることを述べた。

今後は、長崎市方言の音調現象について体系的な記述を進めること、諸方言における不定語が関わる音調現象に関して、通方言的な分析を行うことを目指す。

参考文献

早田輝洋 (1985)『博多方言のアクセント・形態論』福岡：九州大学出版会。

平山輝男 (1951)『九州方言音調の研究』東京：学界之指針社。

久保智之 (2015)「福岡方言の WH 疑問文と複合語」第 97 回九州大学言語学研究会（2015 年 7 月 12 日、九州大学）発表資料。

Kubo, Tomoyuki (2016) WH- prosody and compound accent, *Bungaku Kenkyu* 113, 1-8. Kyushu University.

松浦年男 (2014)『長崎方言から見た語音調の構造』東京：ひつじ書房。

坂口至 (2001)「長崎方言のアクセント」『音声研究』5 (3), 33-41.

佐藤久美子 (2015)「長崎市方言の不定語を含む文におけるアクセントの弱化と中和」第 261 回筑紫日本語研究会（2015 年 8 月 11 日、九重共同研修所）発表資料。

Sato, Kumiko (2015) Prosody of sentences with indeterminate words in Nagasaki Japanese, *Phonological Studies* 19, 73-80.